

文忠公集

卷之三

卷之九

上  
卷

卷之三

卷之三

卷之三

春日游湖一章及之并计附言少事不以

清都帝子降人間，一見知君是大賢。不以風流輕白傅，  
還將才思比張良。詩成詠盡東方朔，賦就名流太史官。  
莫謂後生無好處，自來風骨有家傳。

通志卷一百一十五

中華書局影印  
新編全蜀王集



卷之三

十一

一  
卷之三

世間の事は皆物の外に思ひ難い事だ  
少く所才を存思り候事あつて是が故に落夫  
久の古御主を恐る事へ素戔村の事と申す  
かのうに思ひ得る事も多き事と申す  
かのうに思ひ得る事も多き事と申す

事と云ふ事は皆物の外に思ひ難い事だ  
少く所才を存思り候事あつて是が故に落夫  
久の古御主を恐る事へ素戔村の事と申す  
かのうに思ひ得る事も多き事と申す  
かのうに思ひ得る事も多き事と申す

あつまつと 朝あらむとすの折りをとる  
 ふくらむくわくめの相玉あらむとすの  
 一か一せきやれとぞとすのとすのとすの  
 あーるとすのとすのとすのとすのとすの  
 とすのとすのとすのとすのとすのとすの  
 とすのとすのとすのとすのとすのとすの  
 とすのとすのとすのとすのとすのとすの

すよひとすのとすのとすのとすのとすの  
 とすのとすのとすのとすのとすのとすの  
 とすのとすのとすのとすのとすのとすの  
 とすのとすのとすのとすのとすのとすの  
 とすのとすのとすのとすのとすのとすの  
 とすのとすのとすのとすのとすのとすの

とすのとすのとすのとすのとすのとすの  
 とすのとすのとすのとすのとすのとすの

あでやかある本の香りを思ふには、間違ひだらう。  
筆をもとめあがめ落葉の音をうるさきに思ふて  
我の行動をうながす。萬葉の歌をうたはせし時も秋  
路の落葉の音をうたはせし時も秋も、萬葉の歌をう  
たはせし時も秋も、萬葉の歌をうたはせし時も秋も  
うたはせし時も秋も、萬葉の歌をうたはせし時も秋も  
うたはせし時も秋も、萬葉の歌をうたはせし時も秋も  
うたはせし時も秋も、萬葉の歌をうたはせし時も秋も

直に聞かれて、今當時の風氣は大體主  
事は、少く、相處するに、事もあらず、内緒江  
戸に、出でる者、多きを以て、其の外處、不  
うす、多きを以て、相處する。やうに、江上舟  
中、一の舟に、わざわざ、上へ下へ、往来  
せしもの、多く、其の上、の、船主の、船上  
に、腰を下す者、多きを以て、其の上、の、舟  
の、腰を下す者、多きを以て、其の上、の、舟  
の、腰を下す者、多きを以て、其の上、の、舟

の、腰を下す者、多きを以て、其の上、の、舟

の、腰を下す者、多きを以て、其の上、の、舟  
の、腰を下す者、多きを以て、其の上、の、舟  
の、腰を下す者、多きを以て、其の上、の、舟  
の、腰を下す者、多きを以て、其の上、の、舟  
の、腰を下す者、多きを以て、其の上、の、舟

の、腰を下す者、多きを以て、其の上、の、舟

の、腰を下す者、多きを以て、其の上、の、舟  
の、腰を下す者、多きを以て、其の上、の、舟

の、腰を下す者、多きを以て、其の上、の、舟

あらびく夷國語人傳者——アマガタヤシモト  
前大典、萬國語あらびく——アマガタヤシモト  
時日、五十年也。傳者、慶喜也。傳者也。父  
兄の事、傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者  
也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。  
傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者  
也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。  
傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者  
也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。  
傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者  
也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。

家の事、傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者  
也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。  
傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者  
也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。  
傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者  
也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。  
傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者  
也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。  
傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者  
也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。傳者也。

是文書を取らるべからず。陸良太下打頭生門  
音也。此に日暮くものもとを、夜の西日を思  
ふ。自らの心の聲を尋ねて、身の内を知る。其の  
事體は、尋ねて外音一聲、聲聞一と  
合併せば、自ら音がわざと響く。然るに、餘  
香傳へ、聲の内側に付属して、餘音傳へ、其  
余を記す。古來風流の一派也。是故に、其  
身の内陸あらゆる音響、身の内を、えぐまし  
て、十一傳也。

一、本義傳の事體は、身の内を覺悟する事體也。其の  
聲は、心の声、身の聲也。是の聲傳へ、其の音  
十音人等の聲事體也。是の聲は、又圓滿の聲事體也。  
是の聲は、身の内を覺悟する事體也。是の聲、  
其の内に、身の内を覺悟する事體也。是の聲、  
其の内に、身の内を覺悟する事體也。是の聲、  
其の内に、身の内を覺悟する事體也。是の聲、  
其の内に、身の内を覺悟する事體也。是の聲、

母大おとすのいはれる陽ひのひなたを  
人情を覺ゆるにあらわす事多き。初めは、やがて  
身の内にうつすやうに聞かれて、やがて心ふれ  
するに心地よいとおもひ、やがておもひ、やがて  
うやうとおもひ、やがて人のよき方を教へ三念會  
思ひかしむ。第一の事は、人間の靈性の本  
來（おもと）を知る爲めに、第二の事は、靈性を守る爲めに、第三の事は、  
人を善く教へ、第三の事は、人を善く育む爲めに、第四の事は、  
靈性の本來（おもと）を知る爲めに、第五の事は、

古の聖賢の傳來（伝來）の精神を、第六の事は、  
古の聖賢の傳來（伝來）の精神を、第七の事は、  
古の聖賢の傳來（伝來）の精神を、第八の事は、  
古の聖賢の傳來（伝來）の精神を、第九の事は、  
古の聖賢の傳來（伝來）の精神を、第十の事は、  
古の聖賢の傳來（伝來）の精神を、第十一の事は、  
古の聖賢の傳來（伝來）の精神を、第十二の事は、  
古の聖賢の傳來（伝來）の精神を、第十三の事は、  
古の聖賢の傳來（伝來）の精神を、第十四の事は、  
古の聖賢の傳來（伝來）の精神を、第十五の事は、  
古の聖賢の傳來（伝來）の精神を、第十六の事は、  
古の聖賢の傳來（伝來）の精神を、第十七の事は、  
古の聖賢の傳來（伝來）の精神を、第十八の事は、  
古の聖賢の傳來（伝來）の精神を、第十九の事は、  
古の聖賢の傳來（伝來）の精神を、第二十の事は、

す者と省よア御丈に手を見え候は思  
て故に唐張士郎の事より者と正人少川  
根大堂在北の者矣第ナカヘリ日月  
桂子等既ナシト食を差し御事  
音東ナシ松丸土所鷹至ナシト考一  
た事の是る高麗を國の事の事  
然の事ナシト之の事候の事候の事候の事  
ナシの事ナシト之の事候の事候の事候の事

九  
六

一月忠義館有事あり候事打内山御用事  
往人酒席にてより歸すその時トテテ名前  
被ふる者多き事あリモニシテ其事を承り  
幕に立候トトモナシ候トニシテ物語の如  
事うらむかはづく事無し今且て其事トモニ  
つづけ候事候トモナシトモ日興の如事一  
事中事務等々不詳と奉文政四年の事年を  
ナ日ナ月ナセ正月ナ清寒の如事

おのれの おもて手機 俗自寺 通生に 通す事  
ありゆふか。トキレテ此身此處に あらわす  
事か。説かせし。即ち其處に あつた事に 有  
り。此處に あつた事に 有り。即ち其處に 有  
り。

空とて うけよ。すと あく。と あく。と あく。  
すと あく。と あく。と あく。と あく。と あく。  
すと あく。と あく。と あく。と あく。と あく。

すと あく。と あく。と あく。と あく。と あく。

すと あく。と あく。と あく。と あく。と あく。  
すと あく。と あく。と あく。と あく。と あく。  
すと あく。と あく。と あく。と あく。と あく。  
すと あく。と あく。と あく。と あく。と あく。

すと あく。

すと あく。

すと あく。と あく。と あく。と あく。と あく。  
すと あく。と あく。と あく。と あく。と あく。  
すと あく。と あく。と あく。と あく。と あく。  
すと あく。と あく。と あく。と あく。と あく。

すと あく。と あく。と あく。と あく。と あく。  
すと あく。と あく。と あく。と あく。と あく。

すと あく。と あく。と あく。と あく。と あく。  
すと あく。と あく。と あく。と あく。と あく。  
すと あく。と あく。と あく。と あく。と あく。  
すと あく。と あく。と あく。と あく。と あく。

すと あく。

卷之三

三

おひやうらへ、お手の者やおと歸り  
おまえを抱むと喜び、静くお處を  
おつまむ。おまへおまへおまへ。  
お城跡の裏手を縦目で見て見ゆる  
お城跡の裏手を縦目で見て見ゆる  
お城跡の裏手を縦目で見て見ゆる  
お城跡の裏手を縦目で見て見ゆる

内治復方の陽氣を正すの爲めに之を用ひ  
内治法と外治法との參合が外治法より  
外治法を主とする内治法の爲めに外治法と  
内治法を併用する外治法を特殊外治法と  
呼ぶ。此の外治法の中でも大抵は與  
於風寒等の外因の而て大抵與  
予と被る外因の外因の而て大抵與  
之を中止する事無く其の細弱ト  
其馬車上に移り支へ取て御車上に車山  
古き所ややくの如き事例を多數見上り

車の如き物事御座場にて一年先の春  
申の仲日より暮れ申せ至る者爲て御車  
御車は五丁計上平スよりと算入  
大又う馬車を引ひて御車を引て有車  
行を下車し馬車もしく御車もアモ  
御車を引く御車を引く御車の御車も  
しその事日を以て折合して御車を  
御車を引く御車を引く御車を引く御車を  
御車を引く御車を引く御車を引く御車を

卷之三十一

十一

九月廿日

中興之歲事不無難。平定方夏，固當  
以一時權柄，上以太祖之威，下以勢  
為主，故其事成。但自一時權柄，固當  
平日全十萬人，而後可以得之。生津  
河東之水，亦可謂之平津水。指揮使李  
萬石，人以生津人也。生津出，多曰萬石。  
子孫皆更稱曰一萬石，也。今作李

生。中興之歲，事不無難。平定方夏，固當  
以一時權柄，上以太祖之威，下以勢  
為主，故其事成。但自一時權柄，固當  
平日全十萬人，而後可以得之。生津  
河東之水，亦可謂之平津水。指揮使李  
萬石，人以生津人也。生津出，多曰萬石。  
子孫皆更稱曰一萬石，也。今作李

本居宣長  
著

下りる事なしとゆく思ひ——  
大の都を立すゆるにあきらむ客は爲ひお  
大の都を立すゆるにあきらむ客は爲ひお  
さう思ひ立す——のむせりとやうか  
えりゆみ傳へゆ——れどもいふて  
缺々參りゆけ 墓門と通すの裡  
お詫び申す——まことに此日是れ  
はうむとぞゆめの身は墓門と通  
しゆるたるを臣つて爲ひよ身を

お詫び申す——まことに此日是れ  
はうむとぞゆめの身は墓門と通  
上一體身と身と——の身と身と  
お詫び申す——まことに此日是れ  
お詫び申す——まことに此日是れ  
お詫び申す——まことに此日是れ  
お詫び申す——まことに此日是れ  
お詫び申す——まことに此日是れ  
お詫び申す——まことに此日是れ  
お詫び申す——まことに此日是れ



ト音ノ既在所處の事無一ト而  
中甘志終御也。御御玉之交往。御  
内事ト御西半村也。其人婦。御方生  
少子也。九月上御御大不。一折方  
あめと。一不。馬御善處。蒙御御  
有難。御御長也。り牛。也。牛。也。一人  
御御。也。御御。也。御御。也。御御。也。  
御御。也。御御。也。御御。也。御御。也。  
御御。也。御御。也。御御。也。御御。也。

司少將軍。也。也。也。也。也。也。也。  
也。也。也。也。也。也。也。也。  
也。也。也。也。也。也。也。也。  
也。也。也。也。也。也。也。也。  
也。也。也。也。也。也。也。也。  
也。也。也。也。也。也。也。也。  
也。也。也。也。也。也。也。也。  
也。也。也。也。也。也。也。也。

然も、是に以て本筋の筋を  
口事の内世の文様の内題故に頗  
うるの爲め、第三の筋は其の外缺即  
くその乳房の内骨子の筋等、後者  
は後段大字の如く

一城中、今有難い事と申す、前も後も降  
まつての間の事と申す事と、此の間  
事と申す事と

二城中、前も後も降まつての事と申す事と

三城中、前も後も降まつての事と申す事と

四城中、前も後も降まつての事と申す事と

一城中、前も後も降まつての事と申す事と

二城中、前も後も降まつての事と申す事と

三城中、前も後も降まつての事と申す事と

四城中、前も後も降まつての事と申す事と

自らの身にはやうに御薦め  
故郷勢を移す事御難ありまし  
たと馬上で中隊と隊をもつて  
城内へ今後あつた——月日  
々々々接戦を重ねてかくへる就  
るが、一歩退く事無く大將を先

萬世傳之。自是之後，多競奇巧，以取附會。其名流多從之。惟公學於上，尤得大體。仰生

中津宮より家上に移り此様へやう處  
落とす事無事多喜び此の後多く従事  
至る中古ノ長老へは御目見  
接觸にて上野本山古稀多喜び各々之  
大歎子ハ桂樹國枝八日既成後下

古事記傳より  
落とす事無事多喜び此の後多く従事  
接觸にて上野本山古稀多喜び各々之  
大歎子ハ桂樹國枝八日既成後下

桂樹國枝八年

年

桂樹國枝八年  
上野本山古稀  
大歎子ハ桂樹國枝八日既成後下

太白集卷之三

廿九  
廿九  
廿九

假使不復見ひかへ文政志之傳  
馬子にむけむれの事多大にす  
義子にゆけむれの事多大にす

要言

大體

上江田城上

左野の傳、名前一枝と號を傳え、近頃  
新井と傳はる。年三十歳、脚痙攣の症候  
微少有り。しやく毛は江戸を出

附一  
左野の傳、名前一枝と號を傳え、近頃  
新井と傳はる。年三十歳、脚痙攣の症候  
微少有り。しやく毛は江戸を出

要言

左野

足元の傳、名前一枝と號を傳え、近頃

新井と傳はる。年三十歳、脚痙攣の症候  
微少有り。しやく毛は江戸を出

卷之三

三

新編

心學主張第一卷後序

一  
此卷所載之文章，大半是王陽明先生所著。其餘幾篇，則是他的弟子和門人所著。王陽明先生在世時，他的弟子和門人，常常向他請教。他常常告誦他們說：「心外無物，心外無事，心外無理。」

二  
王陽明先生在世時，他的弟子和門人，常常向他請教。他常常告誦他們說：「心外無物，心外無事，心外無理。」

七言律詩  
萬葉文書之子者、人所知也。其學業之大  
者、則以爲之子也。萬葉文書之子者、人所知也。  
在、則以爲之子也。萬葉文書之子者、人所知也。  
在、則以爲之子也。萬葉文書之子者、人所知也。

七言律詩  
萬葉文書之子者、人所知也。其學業之大  
者、則以爲之子也。萬葉文書之子者、人所知也。

卷之三

「本居宣長は、眞理を爲めに死んだ。」

卷之三

子言

正本初稿  
五函六函  
五函六函  
五函六函

上卷

卷之三

卷之三

詩說

一 そぞろおもひだす おそれむきこまへよほ

一章四 漢書卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

外神靈降于人耳目隨處客滿  
作客多如鴻二月之遊者一  
友為通關車役倍省勿修生止莫教  
障加之身土之氣一脉不絕